



TITLE:

# ニホンザルにおけるオスとメスの 特異的な空間的近接(Ⅲ 共同利用研 究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

北村, 光二

---

CITATION:

北村, 光二. ニホンザルにおけるオスとメスの特異的な空間的近接(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1976, 6: 36-36

ISSUE DATE:

1976-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162708>

RIGHT:

2. 平岩真理子・長谷川寿一。1976。高岩山第Ⅰ群調査報告(1)ポピュレーション構成。第20回プリマール研究会。
3. 岩野泰三・高杉欣一。1975。房総丘陵のニホンザル、千葉県生物。pp. 108-119。日本生物教育会第30回全国大会(千葉大会)実行委員会。「千葉県の生物」編集部編。
4. 小金沢正昭・高杉欣一。1976。房総丘陵におけるニホンザルのフンの形態の季節変化。第20回プリマール研究会。

## ニホンザルにおけるオスとメスの特異的な空間的近接



北村 光二(京大・理)

高崎山A群、B群の観察を通じて、それぞれの群れの内部において、オスとメスとは単にランダムに寄り集まっているのではなく、特定のオスと特定のメスが特異的に近接するように存在していることに注目して、この現象を集中的に記載した。

この社会現象の記載において、対面的相互作用は1種のコミュニケーションの過程として扱われた。挙動を呈示する個体は情報の送り手であり、対面する他の個体はその受け手である。従って、1) これまである1つの社会現象として記述されてきた事柄は、その相互作用に参加しているそれぞれの個体にとっての状況として、それぞれに記載された。2) 観察者の抱いた印象は、そのような情報を受け取った第3者の反応として、個体の行動の記載と並置して記載され、考察の手がかりとなった。

このような視点を用いてなされた記載からこの現象の一般的特性が抽出された。1) メスが特定のオスに一方的に追従する。2) あるオスに特異的に近接するメスは、個体維持におけるアドバンテージを獲得している。これは、メスがそのオスに近接していない時に比べて近接している時に、より優位な個体としてふるまうことができることを意味している。従ってこれは、\*近接の効果、と名付けられる。3) オスとそれに特異的に近接しているメスとの間にはさまざまな程度で親密さが認められるが、それは\*近接の安定性、の漸層的差異として区別される。

そして次のような、ニホンザルの社会の一般的特性についての討論が可能になる。1) 劣位な個体が優位な個体に近接しようとする活動が一般的に存在する。これは\*フォロワーシップ、と名付けられる。2) この活動は\*近接の効果、を先取りしている。3) \*近接の安定性、は\*近接の効果、を顕在化させる。このことは順位形成の過程を理解する手がかりとなる。

## 香春岳におけるニホンザル野生群の生態学的研究



池田 啓(九大・理)

江口 和洋(同上)

香春岳では1974年以来、個体数の変動、遊動域の変化を中心に捕獲後の追跡調査を継続している。1975年は4月と9月に各10日間の調査をおこなった。

### 1) 個体数

4月の調査ではカウントをすることができなかったが、9月27日に群れが車道を15:24~16:00にかけて渡り、A♂4, YA♂1, A♀10, 4才3, 3才2, 2才3, 1才3, Baby 8, 合計33頭が数えられた。9月28日に同じ場所で9:45~10:50にかけて、A♂2, YA♂2, A♀8, 4才0, 3才2, 2才2, 1才2, Baby 7, 合計26のカウントができた。前年からひきつづき出生率が高く個体数は増加傾向にあるものと思われる。

### 2) 遊動

4月、9月とも群れはある地域に数日にわたり滞まる傾向を示した。4月には12日から23日にかけ、香春岳の西側に位置する五徳地区の竹林、9月には24日から29日にかけてムクを中心に採食して香春岳の二の岳東斜面にある神宮院一帯を群れは遊動していた。1日当りの遊動距離は4月で最短0.53km, 最長0.87km, 調査期間中の平均0.71kmであり、9月で0.15~0.82km, 平均0.44kmであった。捕獲の同じ月における遊動距離は1973年4月12~23日で0.68~2.30km, 平均1.53km, 1972年9月27~30日で0.82~2.13km, 平均1.59kmであった。4月、9月とも1日当りの遊動距離が捕獲前のものと比べかなり短くなっている。このことはa) 群れが一定地域に数日にわたり定着しているなど遊動パターンがこれまでとちがってきている。b) 植生には捕獲前と後で大きな変化がないにもかかわらず遊動域の広がり狭くなっていることによるものと思われる。

## 下北半島におけるニホンザルの生息環境としての森林の植生構造と森林施業

荻野 和彦(京大・農)

下北半島のブナ・ヒバ林がニホンザルの生息環境として、どのような植生構造をもち、そこでなされる森林施業がどのような影響を与えるのかを明らかにするため、前年にひきつづき調査をおこなった。

調査地域は下北郡大畑町、大間町、佐井村にまたがる。前年度に設定した6コの永久調査プロットにつけ加え、あらたに2コのプロットを設けた。合計8コのプロットはブナ択伐、漸伐施業区、ヒバ択伐施業区および無施業区から選びだされたもので、プロット内の全立木の